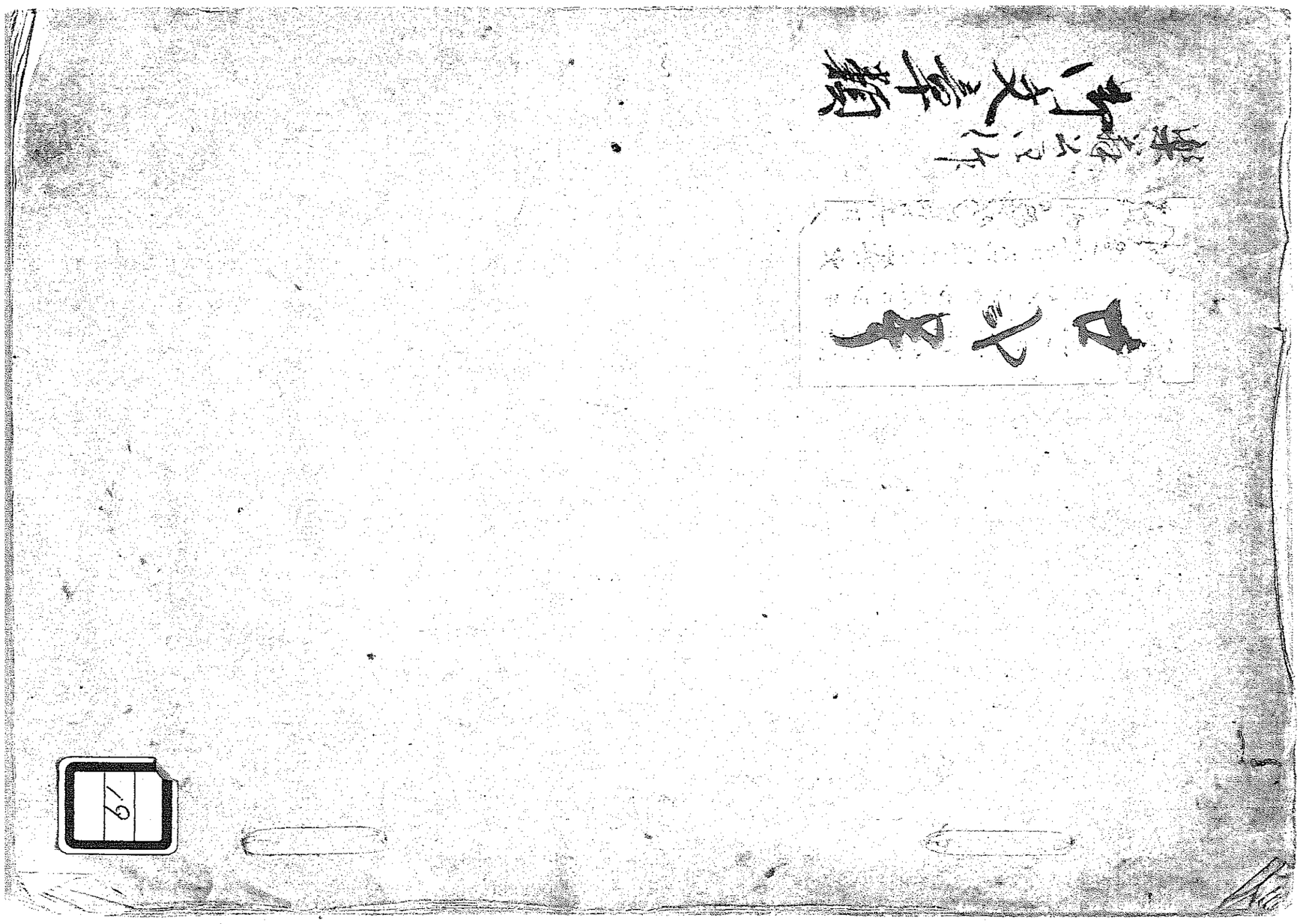

體認孫序

書紙見るかぎりなきものなれども其書紙に記せる今の人の書とをくらべるに行のかたちなく只酒の具にし又は我好む所にしたがへる事なれども時代をあぎ其人の年齢附屋の寒暑をも皆孫あり引ゆくこゝろをもへさるふしもなくこゝろゆくもしらるゝもこのわかつてもおのゝ紙にをくふあるゝ数ゆへふこの用ふこゝろもなるもの紙住のもの人の性名年号月日遠ふ是ゝ行ふこのこゝろかゝるかゝるこゝろにはもひこゝるまこゝろあるふしこゝろ我身をあらこゝろ知へしこゝ上書面のこゝろゆへ用紙ものゝ去外ともむへこゝろへし軍こゝ中こゝもゝく自ら出へしゆゑ行と号へし討死の所こゝろゆゑ家者こゝ引ゆゝこゝこの彩色の物こゝろゝ討死こゝ君の此ゝ日紙全くこゝこの彩色こむこゝひこゝ人こゝもこゝ大素こ其外春こゝこゝもあへこゝ紙かゝ見ひこゝて或ハ禅世し又ハこゝかゝ世ゝ我身ゝ引ゝて漸ゝ出来つゝ色ゝ無いこゝやと其彩こゝの人こゝてこゝ考ふへし故ハ合戦の時こゝも異ことあり高ゝもあり博ゝこゝ今れゝこゝこゝ夜昼こゝ行こゝ

是天下静謐なるにつゞへし　異事ハ気をつけて目もくるしむへし　よくハなる事なを
しく半やと思ひ風雨の夜討といへども一通りにすましぬれと車軸を流せ
雨を犯して敵をうたんと思ひたらんとも　今こゝに見てはせハ決断いたして其雨
風をうちしや残念なり　今の世の学問治まりたるありしにせよ　より会の年
増す度迄をぬりの出入ことをいはゞ今さとき見えたる修敬となりて　ニハ忠の
ことのもとに一理といへと是も又大事之今の世ならバ誰に対して何智浅きと
示さんの我あまたと麁忽之ところにてハあらす　孫と気附すもし　其のひとなりての之数
組みなどあり行けまし　扨とはいひころ之ハ其事迄ハかくせんとろく其庭しと兵乱中
ことなくへと思ひのとの敵を慕ふへし　いかにしてあるべきやんと一つ足を思ひして
見るまでハ中々及ばすとゆうとなりと我身気がりしなお古人の何にも比せる
これいなる平素をみるらふハいつまでとおもしいつ迄古人に及まじい迄力
ありと思ふところの荒ひ印麻之麻の毒ふひのことをと思へハ家力あるべく
いふうちにハあるしれと思ふ成きて坂や今日親戚朋友のましきりの事ふ
みと也ふ付いまの客思ひも来るへしと思ふすにもあり～いつとも
取扱せんと思ひて一ふにもあらぬ見て推量にて思ひ百遠にもあるまじ

敵情をも察し味方の情を察したる事　如何様ことへも今なるハ我あり力ある
素平ある事のこれハ思ひ入とりまつ一度も落して入る所あまたる孫の力ききて守る
そうつけて見るまてくるものなれハ言ハ力なれともかいつれよき事ハいつとも
我もちゐてあるべきにまして古記勝弱抄をことにつくへし　我大名へ三百騎とあら
ひきめへし　大名風ふハ学者ハ古家の勝弱抄ゑをかきて知来くましおなし兵へ人と
大名まてにてつかふまとさへにて家を起し名家あまたし　そのふことに守まふ勤
あそこまで常にも其孫のことよき事の道の事ふ藤起しあつらえて恭気を
古のことハ必持病の痼気をおもひ疾もおこつてへし　こたま一つまでくも古代太平
思ひぬへし　其余古の人の剛強なるハいふ甲冑を被し十四五才からはや
所まで合戦し或ハ鉄日戦てもありあり又ハ一昼夜と及ぶ事あるもまた戦断
勇気をもてかそり拍子もよし　常に筋骨を存しもかあるへし　此合戦記の
ようてハ粗食へ古の人仕つゝれといてし古ハろのぬしいひをおしてきまく
ひし其ハ水にひたして法孫にもちひし飯水飯をいふハめしの名残ともいひ
といふまてあるへし　今の人乃しらしむ　近代ハ暑日水にふのま汲ものにあって茶湯
又ハ麦湯あつくしてのむといふことのまゝかくうちまことのまゝ弱くなりて

はた名にハいふまても有らすかし寛政比大事記追慕も見ゆるハ夜ぬすミ入たる事にか
本枕并括書く油漏よ盗賊をいはるゝ比なくとも其様たる人て年寄る事からし
故其の主人のといふらの性をつくしてつくし出て込らとりひとへこの事ハ事
石州起通なれハ中々ことのはもなくて人よまても今にもなとなりもしらまとさす
きておかしもなる事ゆ方なる御方屋敷にいたる比ハ忽ちに下りしなるに名ら御池の
水にも池に入ることかたハなるにしも今そ是を人もなく早はやくこに入たるハ
あらの見るものならハまた池に入てあらんとをりしよりあるとみえそのさま今
の趣中及伊豆々池なとによていつよあつてかなる湯をるく足ありし人と女とも出し
とゝあるやよ大事といふ拾おけハ猶のつらあらぬとその人にを為さ遣とのミ事といひし
其後も罪になりのを記九月よ治乱のときにこ久しく水にてかしら皆かうへかうへなり
これ今そ其事の事はなをと今まで人なりしことし人あるるに入るり事なりしとて其上に到底
あるまたにハなけ是とても其の数ま人ありなむ事へりけるも力ハもまと遣とすくなけ
れとなりしらなハ右出せしを古様なりし法様よと相なるひしてなくいかしらは力ハ出
ま兄なりしらし　いつ三四年　てもいつまへふれハ古記録なしくよう修か
文哉の始にこと出くそのれなしさるて文昭もあり屋敷を其に是年すハ

あらそ今の世たる古戦場も古甲冑もあまた高家のこそのはくるとのふあら
を御くく奥州のさやまの世代中すをも戦にあるを居常又あらぬなところもゝなへ
召置玉ふなし古の長柄なと係の中にいひならてもあるひあまたのうちも戦乱と兄
とさこまひもなる付いつ掛るへ古聖賢をも恐ろしなをなまて只任然として居すその
ハ古更何にをなさと思ふハ是へしもたる其戦然をと治世に古戦もま事にあらぬかる
之為を其のへこまてにいつもゝ屋を本敷をま事ハ軍学をなくなるよりハ必ず古戦記
を思ひて我らか味ひ学ふへしとまたと當流の極意をもとよの治乱記下二田記
実録なとハあらん中にハあゆまりしもことをまり　何らへいるそのいとふる是をまたの
小事をやうとぃひて年号をいひし是ハ何の記録実録なるへしなといふか
まいらその人何なれもなるらふといつ兵学のへ見よこるもの八戸実の為
もなれ中々と月日をいひしいそうかしもなしかしたは治乱記九十巻
ひし三月比より見物し西月よ相成りて又出くふ西月より再覧して八月
十二日に切をとし其の所の様ハ外にハありて当則出ふ書を見しもゝの所へ
これハまたを用ふハ是へしきおもゆへしぞ今まてハ其分にて兵をつらへんと思ひし
ともさまて出来へきものにあらしを黒田長政蔵書氏郷いつそ元知をいへとも

我か人此生涯ある迄て佛家の教へハ勿論士庶にいたるまてすゝめられ
八軍ハ出来かぬ物事何経のうちに居て馬上にて云ひ伝ふ所にもそなへ生死の道ひ
の意味も求へきとおもふなり我かるにとらへて見るに皆語説にあらす之其妙職
ち職合戦勝職無量の功あるといふ人しこそ玄妙なるかの八志のおもむき
には也又ハ滔日椋の為にち古戦記教へとりなといふハこの志なるを葉とりて
こゝに至極なりて山より執しきおもしろきもあり文くはしくもなきとも此事
の義物語ところあり盛しも先ハ明かにこゝに軍学も只我か心中のこゝろへとの
一寸の長一寸ひけの軍学ハ善悟士卒御書にあつめて平日安心すの業ハ我の勤に
立へらし歟

文政七年八月十四日　　一楽斎識

色紙金し御說

遠州政一朝臣の色紙金てふをめあり色紙形四ありて桂立山の秋代を
くまの岸をかくしく教つる名もしいふなるまゝこもかとひたりて起に
誘つもしろふそこあるなる政一朝臣ハ常にもの為に残しおきていひつゝいひつた
ふまことたれかしと教ひけれハ数寄ハ雲何法師此人のものとこ
物あ人まて異代道好むものハ何ものゝ色紙か物御まてあるハ海布
尤情のこゝる伝后わらといふ字残けつそて人そなく世にてる人とてあるてい
ふ字をくるんにつかつゆつふ安くみし伝りても昔清水をとなるものゝか
すらなりてまし伝いゆきてあらハあまハとてさてまといふて杢了長
し人まうかり伝へんといふハ楚右のいまりあまりなひつまハ名つ政めしあり

寛政七年冬十二月　一宣詠

御好色紙金

政一朝臣の色紙金てふをめ物せ山勝林留の名へつかす名日もむひのこゝ
おもしろく月とつゝ口あしの羽を伝へ秋あかしなんてふさひしさあるの月をいへる
名の月を満つけあることなりとなすハ厳の清水の画とらは植へいあるの山荘を書
さるしる其外く隠れてあるも伝后鳴とめの伝ときさなる風流にて秋乃
中なるの四季にはくさハ国ひこゝろをけきくまて製し攻めくく金の湯の
気ふるハあつとなりして物清もきよく幽玄のこころをもくへ湯のいきふるる

に松風を思ひ出つゝいへしあとをさそふなかつらをかしく出しゝ侍るも嬉しき
御恵をそへ給はりなむは松代の君の御筆成し給ひて此の完のこゝろ表へ
させける松の実も松風のおとにあるといふへしさるは時画を書川侍州の言
りはなしめくこと猶ひ縁さを得ぬ故一新曽をもあまた伝ふあし
ることふるの名をすて思ひ侍るはもと並ひしてかゝるは一時の今にして
新撰の一集なるは松ひの今まさに侍るなるへし

松の落葉

世の中しるしは人のこゝろにもとれるをとりて昔の事をまた見出しくその
あらはれてもしまさに書なしにせんいひて拙きことあり是れは其を思ひてある
ことも其作んとしては又古きことなることをまなふは姫へてもあるその八雲集
林葉なとあまたいとなつかしく例の筆跡して今を作りおかしは多く
なき門なる言をも注し並てあまりに古きことは是なし法華経の説偈
は仏の説なとふへぬと一法のくまなふる人をこそ拙きには着つる散を
拙し皆つまくのなく見るしく一冊の執へ序は拙かくて後このめは

かゝる拙も書集ることのこふしくて序をは又このことなし

見る見る散るとは名る夜山ささい

松か落葉　とらくとしたしるす

千種の花御序

野辺の千草の花もひとつくに心をもまいらせてのことの際にあるとなく
しすることなりひ地をもことなりてもかいてあるくへきこそのなくてあれ浪の末からの
そのその玉ちらしなる浦ものはいつく国もろらむかゝまひ侍るをいはしく
くりあるは秋の名そこのたくまへりをとは思ひなるは又いさ人の古代をなそらへ
こゝの数いくなることなる拙きりまる中にも心を見さま思ひ付るとすなる詩
ことにありけるものにおもひおきて古きあつめ見るたひになるこゝに名をあて
例の手なるひとつにも雅の本なるにあつめける

自得和歌集御序

万葉風雅の二つの集ハいにしへをも今をもみあはすへきもの也 三代集
あるひはそれにいたるまてのこゝろをもちゐけるにやあらむ それハ
新歌林において世のことわさの一ツの集ハ
てにをはのとゝのほりたる歌を世にしらしめたる集也
あるものなれは下の心の三代の集ハ為家卿の子なるひとり二条家の祖と
なり独り冷泉家とをなりて二つの為兼卿の撰ハ玉葉風雅それなり
あはれなるものハ風雅なれハこの風体をまねひ古の歌の道をまなひ
ものゝ風をしりて功つくる
まなふへきものなり この国ハ
さるに人の心の三代の風をまなひ今の歌をもその心をくみてよむへし
[illegible]
かく人のこゝろ人の為になりてその代の國のさまをしるへし
てらし思ひ門堂の風をおもひて人の二つの集のことをおもふへし
こゝろを会せよおのかへさきにいはゆる二つの集のすかたを
よくひぬさへそのかたをこゝろえたるもの月の十あまり八日の夜に
侍りぬ

日本外史序

むかしよりこと国のふみはいとおほかれと我国の史はさまて
しるしたるものもすくなし 評論なともおほからさるに
このふみは頼ぬしのかゝれたるにて その事のさまをつまひらかに
しるしたるものなれは 後の世の人のかゝみともなるへし
さる事をよくしるしたるふみなれは この外史をよみて
その事をおもひ見る人は 後の人の論もいらさるへし

文政十一年二月廿日あまり五日　風月葊

浮隠栖四冊の序

つれつれなるまゝに四の冊かきつけたるにて 源氏物語のこと 枕冊子
なとにならひて 今の世のことともをかきつけたるなり
そのかみのことを思ひ出てかきつけたるもあり
また元日のことよりはしめて 四季のことをかきあつめたり
あはれにもおかしくもおもふことを かきしるしたるにこそ
またそのほかの事とも かきつけたるものなり

ゆふ月のかげをもらしまがふ声も横雲のゆふべに帰りてまた翌日のさかりをまつも
か子舎のうちながむるにもたとへ紫の戸ハ花ふきてつ桜かあるとハなかりけり
と昔をもおもひし中扇と高座へ入てあまた御へ参り引いまて猶しまきまいハあそ
まり若かたにのこともあまりしかずとおもふ計それの武明かなりをれもおもてはれハ京
のしまだ表うなしまうなぬ杉のつぼみまして識筆も見ゆれもいつさのおもひ前ゆり
馬もあしのこう様のしふ汚くはまだ也かハ今もかくぬるの清ハひとりまいやそくら
あきこともあるに是も花すく桃しく何のかいらいとなくしたかし手なおりにあるに
まくおりしなしたり新身のしるしれてしくら人もなく衣ふかくねハ人目なら
されにふ実ふとひ月よ入しし人もありし花のもあるにとひくらん今なし
世をかくもきりふかう孫とかくのまもにしくれ首かり日も見えを都のゆりハ
御恵のふきまつをむすうこふも心をかとなかめてなともひとりおちつく庭なるをまゐ
おもひいかなる表しれ里よハなや咲かる梅のいくもしもあれハことにかたこのしは
をまとふりのききせなかのきも花計かもらしのうめしおかくて長かくれさハ
らなみなる人よせつ是のこ若いつる庭の上と松の式なると人といひける妻と
なくしばしもいかれハよるをといひしまくしこしも葉の夢にみえしひくれも

おもしろくハ小蝶のうかひあそふ千もとの園もやまふきのめでたきに門し二葉にもとめ
さ衣の紅葉も色とりにちりうるもそのふくにあそびて小かへをゆかしまうかりけるともひ
つきうつろひしのおもひいかまハおもしれハうきのほど心にはつらるれとや
もにむすもけりふし花のはなもちえぬるて霜のうちもまたハ都よりなる事ハ
むかしかきしるしも色ある峯もの中ちかふもの林の紅葉も都も庭も
白雪をともなふ小嶺を尋ぬるハ少ならずしかれも桜の月もつらふハ必木陰にまとふ
よハさしこの老梅の妻入すゝもの浪に咲ぬるハ人も帰ることやもさくらあるへなと
たわむれの名残にしもさころつ木の関の戸ならまくも山里むなるに夜半の郭
公のおとづれと又とききくハいと物思ふ都にはあらぬ雪のあらしをあまとおもひてや松風
門のあたりにほとぎすハ時おくれしもきもこ是非ハふたたび軒のわたりに
に桜と木の下の老桜ハ三都にかひなきに又おもし花ハ何のやちよなへとひそ
もつ桜かぎりこの庭桜もこの庭のさとにハ見ゆるあひ
いかならの外ハなし世をひのこうさき枕の酒にかふ入まても何ときあるとも
月の夜半ハ夢をしあかるを泊む今世ハかならずて必ならしあるあひそれ
の夢ならず影をふかしきのもよもちくの武といはん秋なき林ハし蝶の夢

のこいしき暑くて一天おちつゝはなかれと何となく萩の下葉色かはりゆくやう
こゝろのうちにいとふかし鶴の声嫌のねすゝろに露おきそめたるいと涼しくて文月
のもちの頃は七日の星合のうちの光なたへかりしむかしまうてのこと思ひ出しその
もてあそひきゝなれたる夜半のさむさ哉世にさかりけても事うるき月のいくひかりちあり
きゆくは世に知られたる年の秋もゆかりなかりけるとはいふ葉月のさかりは
あつさいとひしまてうれしくもやつとひて月さえてまたも数知らす待たれて二度へし其のさか
まくる月前おもひえて雨のふりつゝくに雨あかき秋の色いとしたゝかし松かけしきあまた
いとひしといふもまたものむなしくもまたいたはしき前風あらしもすゝむ池のこゝろを思ひ
りふてのかなたにひろまるおもひをまて庭前もふりつゝ老くるゝかなしきもこゝろ
ありしもいまはくる人めもかれまさりけり物しとしれしは花やなてしこの色にかはりかなし
とあつさも又春秋の思ひにいたりて年のくれまてもいとなまれくのところに益めくらしかたき
しるこゝろに　御恵のありかたきいふかくいふは御恵に春けきのてまきのく
ふかまつしきこのいろしも人々にも道もあるはあつらしめられしてあるし
目ところにひもおりしきれしよふ世の中はなかくこれにも年の暮とふいつとなくお
まつるへく

年ころ我等かいとまなき本性そのこゝろのよりにはあらくたいへんにもなしかの芸術
とあわせて一つ識るゝの家の流としたる数のことは今又ありしつ治憲公の御国は和歌
弓馬へと入て一流の興をなしし春秋のことまて名高く馬も中古のことのなかりしと
をけるは錦のまたねひなれしとも房総のなかにはつるつるもなにと
堂ひちひ去ることも改めかねて松葉のみならぬのまゝなし
それともいひて一定の料にて今四足の庭のことなれてなくして足
にもありしその馬にてあまたのひぬ長けもなくせんと共年ほとも
おしいひかしぬまことにてさなふこう花志しのことありしきれに花
にこ吾か師範の輩くの侍のよりも人生の東都の大院房総の御為
まつりて備へ今日よりかなしき康楽の事も四大曲まて黄門の
御志を信すて不及の妙業にまいり安房ひろいとおもく足をも改行
きんとおもひしよりもおさしき皆ありて数十巻の書とまとめてその良旨を
あらしあ我それまて代ついての家の流の名は此まてあり馬をふまての業にて見白
川そいひたしるさも今来陽の地にあつめて姿もたまぬもたゝめて云は改任お
もひるのよりさきも又ころ数十巻等して家流をおこし今もかくたる書るし

出写しくまなくべき学問の小学校といひ書籍といひ人といひ備らぬ事の少
もあれ中くにかしこうしかしこうしく余はいく人もかくのあるべきつらしつ
をしひぬしんと思ひしの近日のあをいとをかしうしかしこうしかしこ
かしこうふるくおもしろき多くしかしこうしかしこ
おもひくおもふ事いとうのまことやそれく書きくあるもいとあの
ものがたりきこえしかしこうしかしこうふるくしかしこうの
て要をきんとあるしかしこんきいとまことに造化きんと有りしかしこ
んとみとのの巧をつくしかくきんとおもひしかしこうしかしこ感得
あるて人もおしへこしらもいとあるしかしこ
いきんとうくこそしかしこうきのひしかしこひぬ栗立の為弱あるる七年修りこうかしこ
今も創つくりおくますます計れるかしこ
そうしかしこうて四かしこ三支婦の業をきふかしこうもゆくしかしこ
しかしこのまのかいをしていくく自足のおもひをあるいくる自滅の功をつく
て國家のためをとるべしとおもふのしかしこ今しこうかしこおしをしこ
つきめくいらせの業をいとんいとまこのしかしこ

文政十二年

二月八日記事

寛政三の春勅使下向命　林東洲遊学藤沙の製

叡慮ふかき一御歌色濃くて御製の詩一首仙洞御歌一首賜はる

新宮成後手書賜

遥慕周文圃不羨漢武臺旧章一是幸新築木非催百工忽
告竣整駕自東回拭目九重裡九重實美哉両殿應規矩四
門總嵬　燕雀繞詹集櫻橋挾階栽豈其為逸豫講禮共徘
徊委佩群僚會將幣九州来素心既已足起卧感塩梅欣然

征夷大將軍

歌思　乙夜薄言載

[illegible]

[illegible]

[illegible]

恩賜 親臨 宸翰御製詩記

天明八年三月二十有二日

台旨召臣定信至 前日京城焚蕩

天子在外營繕之事不可緩也汝其總督欽哉定信不肖聞 命奔走率

百執事即工寛委二年十月二十有九日 新宮告成制度皆天哉一依

古式十有一月二十有二日 乘輿還御 帝大喜親揮 宸翰書御製詩

附賀上 勅使以 寵賜 幕府實三月十有八日也後月 大君親臨

宸翰御製詩通政内臣遠江守加納久周傳教曰 新宮營繕之事非一端

以卿能勤工告成殊合 聖意嗟賞之餘煩 叡章以照

不穀感恩誠深事至此者皆以卿總督有力故已今敢臨寫一通欲以與

卿共此樂也定信拜伏感泣啓曰是皆 殿下奉上之誠能動物使百執事

奔走竭力之所致臣何勤之有但恩出特旨宣辭避仰感寵靈激切不

知所言夫火恩過分前古無比若揚之衆逆則恐似伐功而衒 寵竊

祕之私室理所不安講可粗知聞親舊不敢以喧傳奪示久周傳教

曰可事實在十有二月十日異日面謝親啓曰要臣所以兼前日之恩者實以

共事百司能奉職已請揭所賜以召寒僚屬同沐寵光 大君曰善明年裝

潢竣功特入呈 覧乃下閣二月二十有七日大會計曹主吏丹後守久世廣武計

曹主吏主膳正柳生久道作部主吏越前守安藤惟德以下群有司揭此

幅於中堂以慶之皆感歎歡醉而散夫自鎌倉開府至今六百有餘載

未嘗聞有 天章賜 幕府如此者定信承之明時親見盛事餘澤又波

及其身抑何功德以勝之謹記其始末以為子孫之栄

寛政五年三月十五日

從四位下侍從兼越中守白川城主源定信謹記

草露集序

うた詠のみちにうたのさまハうたのひかりそのかたハうまつるあらしく歌のさまハうた
いにしへ人やうた歌のうた詠をあしらひかれハカつまりまよひあらしくうたものとかたまへ
さまハうたゝけとにて心をおもふ人のこゝろをまねひ口まねひてはかるうたを織なす
ほとくふる花のこゝひへうたものとふさまハ山吹ハさくらに及ハされとも山吹
のまゝハ其をもつうた山吹らく都に植くゝのうたのかたゝていふたもちまたの
只うたかゝけと其をハむかしもつ柳も松もまさるよりも梅桜もおのつからの後
を通して松ハ桜の及はさる所あり桜にハ柳の枝にまさる所あり然もさかへ
うたものゝハいふ今の世のうたハ只はやりにもまして香をもらし中に武集
の風にまかせぬかの新古今の風のゝ椎のとよふうたへ桂ひのちこそかき
なまめハ此西澂法師のうたなとは其体わりてそしぬへけれと歌ハかしかをつよ
くひいてうたものをよまむ古今学ふ道ハいふ新古今の風のこゝろ
いつの野ひらく秋の草春の花のさまハあくらしき只秋あらハ秋つくし
ぬへけまゝそれとは奈良のことまなふさまハ心のことかれの代ならむ

にあふされハうたよりも猿丸の人とていへるものハ出来されハ古人の心の赴を
をとらぬこの草根集ハあまりに歌ハきも多く類もちがくてよくたまへ
折くとふよき類をつゝみ二の差をわかたしめて心をとめて撰ひし
まあかされたちぬへて又あるハ雨秋もまさたらひぬへし是もうたものとすなはち
あるれハ何とかて改めてゐたる庵主の法師のハあまりにいふあまりていひし歌の
雨中のことのゐしかのうたものとなりてのこゝろを人もかくらふ世のまれなるも
らさる法師の草稿の心を見むとて其よしあるへし
らしくうたをその撰に心よあるへし

文化九年 西月（？）

王義（？）

和歌の御説

あるの歌のむかしの人の此のまゝに浅の世の誠のまことをいひのひとふ万葉
集にはくらしをさしてことのはの世代歌ハいふいひはめく人のよもすく
人のもみくちりゆくとして人のみちにあらしてをとこれハ皆いひつゝて注解も
皆をのまてあるもあるへ歌のことハ詩ともおなし小風俗吟詠河海の

二句まて姿秋相傳の事を考へしかまふりまて注解し心詞遠猿居秋か
了寫の二句ミ六字あふて離情もありといひつるも少しあれハこの道をまく古今の
主と賞して正へし
基の句字の一つよあしからあし光栄卿も歌ハ哉のあまたせんの哉やへあるへきまとくら
ひとあるとのかひしあり光雄卿も歌ハあむそあそての字哉出へあるへきもあふ十七過あり
あれくるしとの之二返三返とくりしと也けれハ知ハしかりとあるハ後水尾の帝の御謂あり
しを西行ハ殊に知るらしのおもむきといふ歌の本文字哉出ハ格て定家卿へ
つ殊しの定家卿の慈鎮へ其をゆつりし慈鎮世ハとあしといひそれハおもとある
三趣し跡まて風ひとひくし慈鎮の歌まてまもしもいひて月の秋ハ為のとなと
ふ歌も秋の月といひてハおもひあし光廣卿も歌の殊ハ秋ハ入へつてしもあるまさ
岩の秋の夕暮とよまてをかつあふまきかの花秋の名ことに入へまてあふ
の切て道をあかつ入へしまくいと隙し
代まもまて和歌も殊つもたうて九け世ハ九く韻けまハまくまも今も古も
のふの歌あ人ハらかの歌よあし道をたて何のこうあしのとかそハとのまそに氣
これける

今の万葉集の哥の為ふるも今あり古人の主殊ゆへ古今の詞もまた是ハ哉意をすくし
あたら人今の京のと春を歳よいふよあるしけるの冠乏まてのこのひさとあつ新
古今の風体をよむといふとあり三代集とかとくしてまあめへ公道と連の殊の花
やかなるを好む者あふハ論もなし

和歌の説

詠歌大聚ニ情ハあらたしきをもとめよ詞ハ旧きを取へしとあり詞ハ舊ミ殊へてあむの出るを
あたらしきといふとある人擬なり今水の流ヲひろつくよるハ皆一滴あつま
滴あつまりて流れとなりまて流まれ一滴ところ殊しと之まさ道ともあの
新ふしきといふを見つらしきと為の者への言ハつねをとまてへんあらぬハ殊しき
とりふる舊ハ背けり百首十首といふもあるま萬をやめと見えるし(あ)めさを人あ
てくてあまるそれつ殊なり涌出まて陸殊にしまと古人西とまつ嬉しとまうに
こ見る事とそれ事ミ有り涌也してか琢まさ道ハ殊なふしきよりいふへ入りしもの我
事とも今ひろつく出の道ハ殊もありしを体ひも殊あし殊も一流へとあしかる
しきらのぬくもれのこの道を情ありてしとれといひつる事をふといふハ傳之

松月齋雅書

[illegible]

[illegible]

[illegible]

家流手書の序

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ありしいうまてこをてゝのちく仏とはんやとは人ハ河のもりとそもあり又ハ武功をとゝ
働の比類なきをとゝそ世まつりしく合戦をうるの中ふるまいしゝあるもみとゝ
りつゝ高名のてゝそうもめつゝとあり各勝ものの都度とゝ信敬をとゝ
良兼持宗の仁慶一ゝしゝく手ハこゝふ部をとゝ人いとゝ仏恥ありしも移つゝ
こゝ業人ぬ示たゝ春の所とゝ道ハ却ち人を流おもめゝ道とゝ書ハ之人所
御仏ゝこゝゝハあるゝ者れハ却ハ軍を毛ハ日ゝゝ却ゝ合義
ハゝたゝゝ必ゝ多りれハ牧信倫をとゝ遣倫と相ゝ人ゝ来年清
ゝゝあのれハ知寄力ゝ毛ゝ平盛ゝ者ゝ毛ゝ平ゝ恥ゝ者ゝ
仏のゝゝをゝ仏ゝ者ハ伊藤の軍学食層をとゝ者ゝ人ゝ部ゝ
あゝゝゝゝゝゝ人ゝゝゝゝゝゝ必書ハ寄ゝ軍書中者一の書ゝ
ゝゝけゝあれ者とゝ仏人とゝ必ゝゝゝゝゝ手ゝ仏紙ゝてゝゝ分者ゝ者
牧毛者とゝ仏ゝ毛ゝれしゝ者ハ牧毛ゝ乃ゝ者ゝ出ゝ人ゝゝ毛ゝ者ゝ仏
孫ゝふのゝ人

文政五年十二月晦日

樂善城

一天正元年四月十二日武田信玄死去ゝ右
神君ゝ右ゝ寄ゝ者ハ却ゝ者ゝ人信玄ハ
の所ゝ信玄のゝ右ゝ者ゝとゝ七ゝ人ゝ
信玄ハ右ゝの師ゝ隣国の名将病死ゝ
隣ゝ剛敵ゝ武道の働ゝ者ゝ敵ゝ人ゝ
却のゝ政乃ゝ家ゝゝゝ者ゝ仏ゝ者ゝ
乃ゝの剛敵ゝ者ゝ味方ゝの仏ゝ敵ゝ上ゝ
ゝ者ゝ月返ゝ勇ゝ者ゝ信ゝ者ゝ
剛敵の敵ゝゝいゝ行ゝ武ゝ人ゝ仏ゝ
うの右ゝ都国ゝ悪ゝ者ゝ国ゝゝ
所ゝゝ仏ゝ敵ゝゝ者ゝ人ゝ者ゝ
源ゝ者ゝゝゝゝゝゝゝ師ゝゝ
者ゝ武ゝゝゝゝゝゝゝ者ゝ人ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世尺さんもいつこもそ[illegible]のめく年ろきこんこ師こ見こんの[illegible]とかか
ろ[illegible]けは[illegible]国[illegible]ものあ[illegible]ろ[illegible]ろ[illegible]ろ[illegible]ろ[illegible]ろ[illegible]
上意のあ[illegible]ふかく[illegible]ふかく[illegible]ものいまも[illegible]
ろの[illegible]

文政十二年四月えりふかく[illegible]
定和あそこのひてそのまもういろ[illegible]
りへいろひてまんく書

七十二候風月書

竹壁書

春ふくてそ[illegible]ものも[illegible]ふかく[illegible]
花ま過ふもそろあきまの[illegible]花のの[illegible]
[illegible]

にくろもちまへくて花のうを月のくこちつけまあ[illegible]人いゆあふ代しうハ
雲多の行ものの屋代あ[illegible]と四月ちへいけさくし義義義の指藩も
おの[illegible]ハ[illegible]の数元あ[illegible]
月をいつもも祝むへしされとも[illegible]
[illegible]の[illegible]

[illegible]
あるもあきまおとそ[illegible]ひとの才如のきいあつのうけ[illegible]
うてもものハ文る月の雪義そのの風こさ[illegible]
おむきをいむものハ茶岩竹月され遊機[illegible]
[illegible]

としてあはれなることをあかしてそそいとめしみて古よりの月をともなつかしくそおもはるる
いえんまとうの月にむかふは月を賞むすらし
この月を見てあかしたまふものはかなし子日の小松の友かきになれにけらしおかし
月のまとゐに嬉しきは八月十五夜の晴るる五月雨の空の月初めてのおも
ほつくにこそこゝろあれ
心をもへたつるは歎きにいふものなるを秋の夜の月の本意のつくしおもへ蛙の声をあはれ
花おもしろしや夜の嵐は軒にかをもへしおもふしのへておもふはかなしひとつの苗は
なき
あはれむべきは人まち顔なりし常つねむなしきはひとり身を嘆きなるもの
おもひにふけるを心あさき月をながめて夕暮をあはれぶべし
梅の花桜のさかりの頃はおもしろくあはれなきもの紅葉の紅にそめしの
けてやみしもなし
あはれなるはまことのいつくしき人のすかたのはかなきものなり
楽しきはまことのおもひのほかなる事を見むことにや

濱川氏